

1 建築物

(9) エレベーター②

●整備例

● 条例による整備基準

◇ ハートビル法による誘導的基準

無印 標準的な寸法や配慮の例

▲ 参考事例等

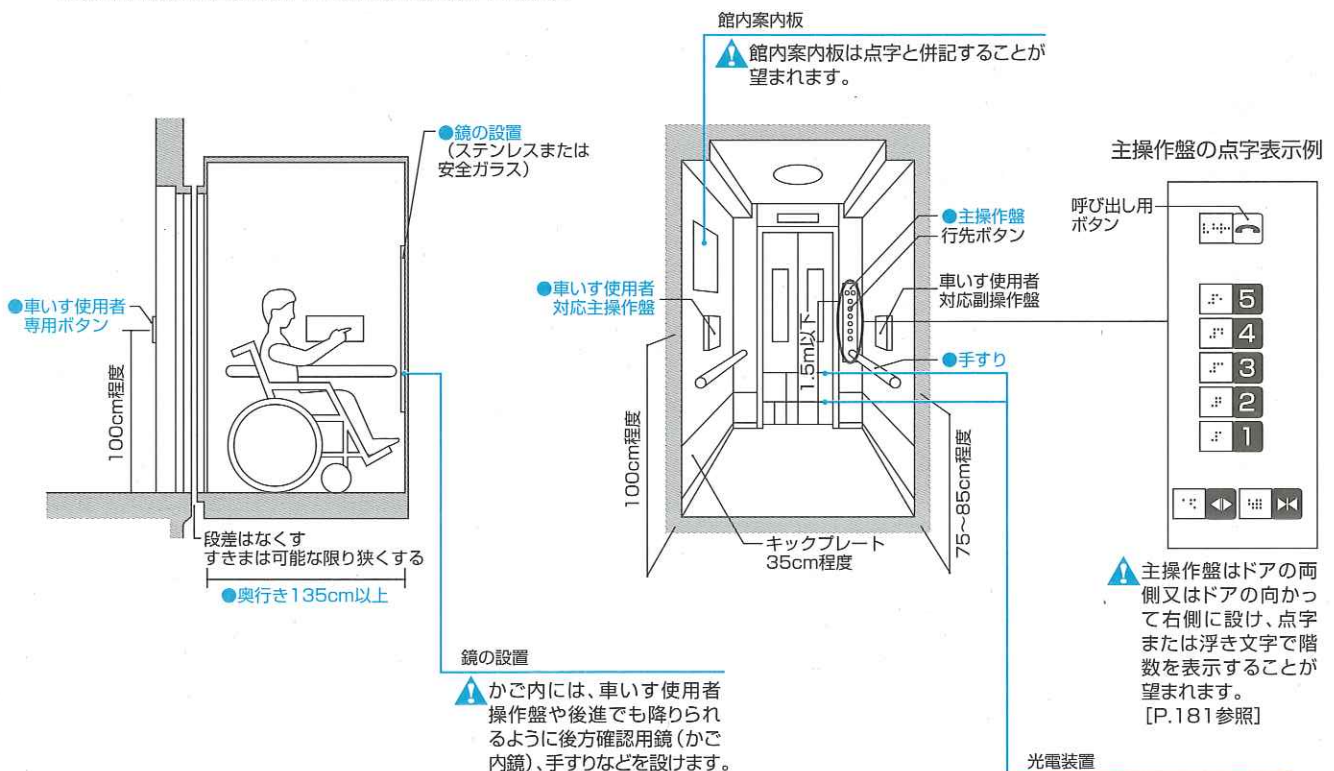
※ 注意マーク

■ エレベーターの整備例

▲ エレベーターは、玄関や主要な室の出入口からわかりやすい場所に設置します。

▲ 乗降口のドアは、乗降が確認できるまで閉鎖しない構造とします。また、開閉時間が短いものは危険性を伴うので、ドアの開放時間に配慮します。

▲ 車いす使用者も一般の利用客と同様に、前進してエレベーターに乗り込み、中で向きを変えて前進して降りることが基本となります。車いすの転回可能な大きさは、通常11人乗り以上のものとなります。

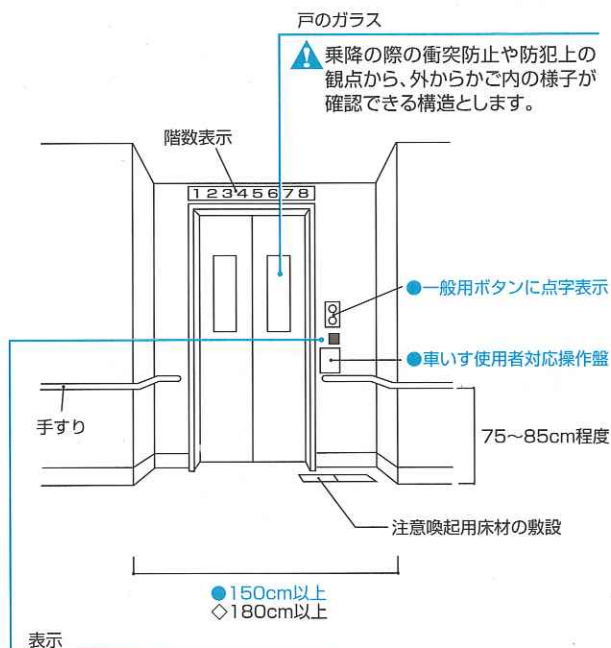


▲ 主操作盤はドアの両側又はドアの向かって右側に設け、点字または浮き文字で階数を表示することが望まれます。
[P.181参照]

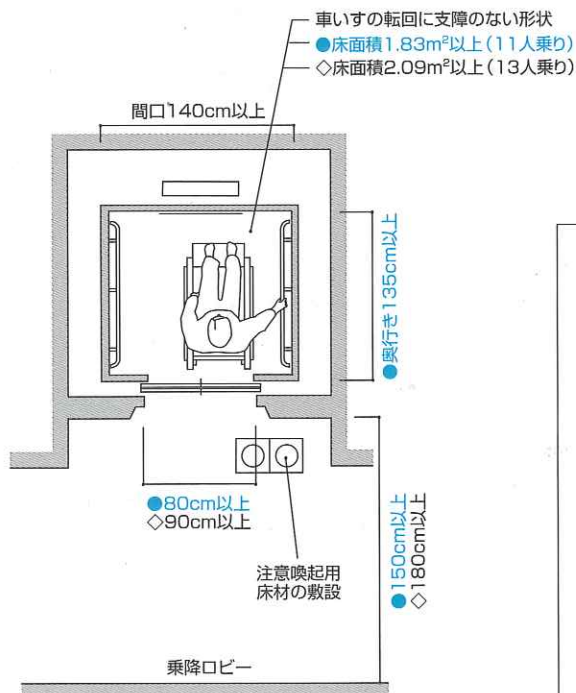
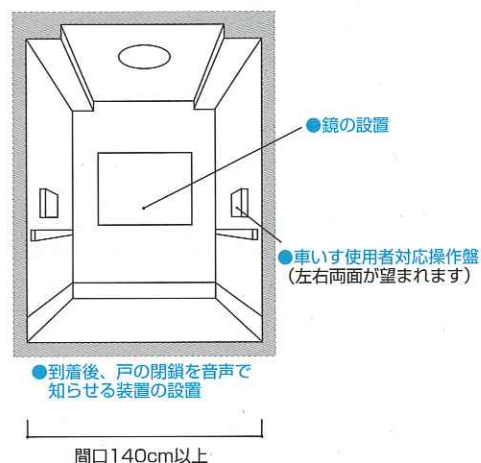
光電装置

▲ 利用者の乗降を確認するための光電装置は、床面から20cmと50cm程度の高さの2か所に設置します(この2か所は車いすのフットレスト部分の高さと身体の一部の高さです。)

▲ その他の規格は、日本エレベーター協会による「車いす兼用エレベーターに関する標準」、及び「視覚障害者兼用エレベーターに関する標準」の基準に適合させるものとします。



▲乗降ロビー及び乗り場ボタンなどには、車いす使用者が利用しやすいエレベーターであることを表示したマークを設置します。

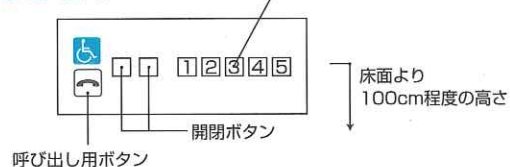


車いす使用者等対応操作盤の例

専用主操作盤



専用副操作盤



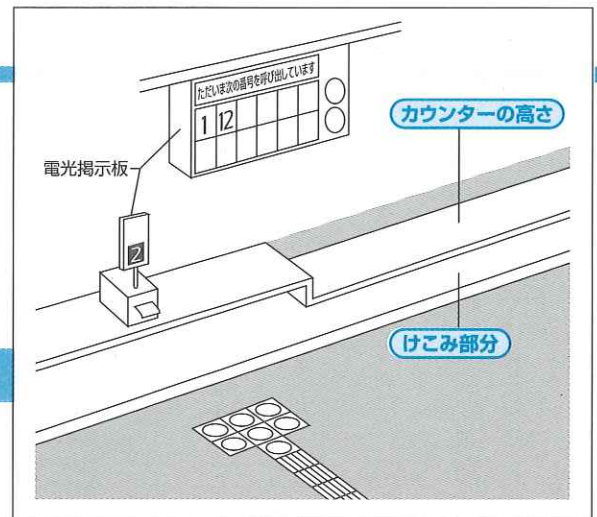
1 建築物

(10) 受付カウンター及び記載台

設計のポイント

受付カウンター及び記載台は、下部に車いすのひざや足先が入るスペースを設けるなど、車いす使用者の利用に配慮した構造とする必要があります。

□利用者の呼び出しを行う受付カウンターでは、音声によるほか、聴覚障害者の利用に配慮した文字による呼び出し装置を設けることが望めます。



整備基準

【適用施設／建築物】

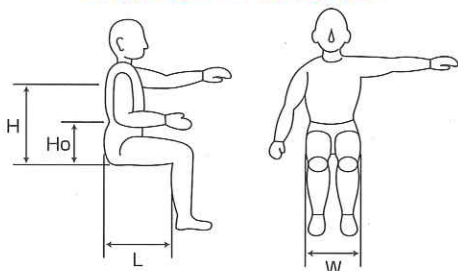
●整備基準

受付カウンター及び記載台を設ける場合においては、車いす使用者が円滑に利用できるように高さ及びけこみに配慮した受付カウンター及び記載台を1以上設けること。

●基準の解説

【参考】身体値に基づく作業台等の寸法の目安

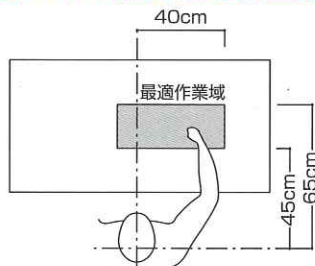
身体値と車いす寸法の関係



車いす寸法	身体値との関係
座 幅	W(腰幅)+5cm
座 長	L(背面※膝窩長)-5cm
背もたれ高	H(座面※腋窩長)-10cm
肘当て高	Ho(座面～肘高)+2cm

※膝窩:しつか(膝の裏のこと) ※腋窩:えきか(腋の下のこと)

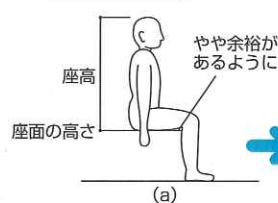
平面からみた最適作業域(右上肘側)



作業台といすの関係

$$[\text{差尺} = \frac{\text{座高 (cm)}}{3} - 1 \text{ cm}]$$

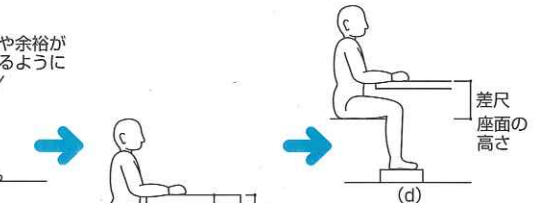
- ・一般の場合
- ・車いす使用者以外の下肢障害者などの場合



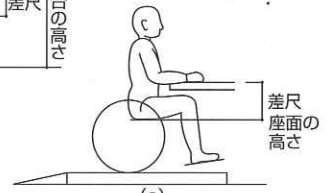
車いす使用者の場合



いすの高さを決める



いすの高さに差尺を加えて作業台の高さを決める



台の高さを変えられない時のみ、いすの高さで調節する

作業内容と差尺の関係

作業内容	差 尺
組立作業	差尺のまま
キーボード操作	差尺のまま
一般事務	差尺+1~2cm

キーボード操作における高さは、キートップ(キーボタンの上面)とする。

出典:作業療法ジャーナルvol.27 No.10 1993年 三輪書店

● 整備例

● 条例による整備基準

◇ ハートビル法による誘導的基準

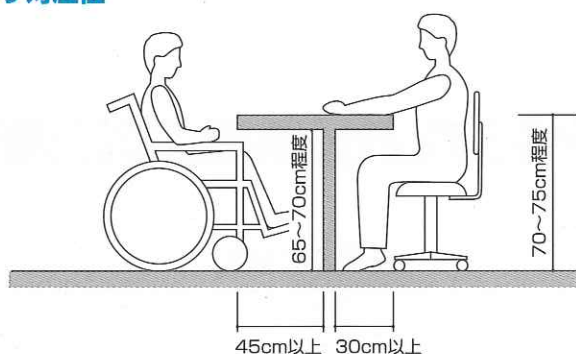
無印 標準的な寸法や配慮の例

▲ 参考事例等

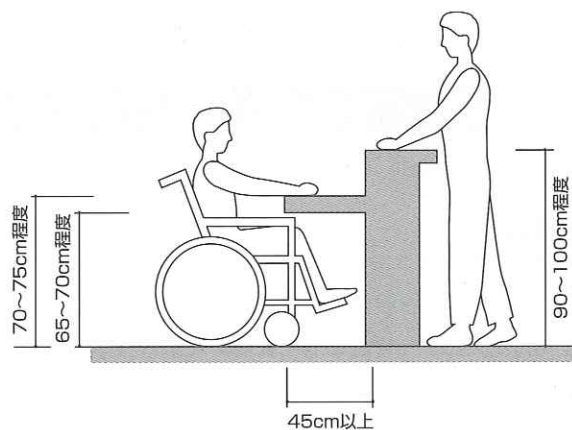
⊗ 注意マーク

受付カウンター及び記載台

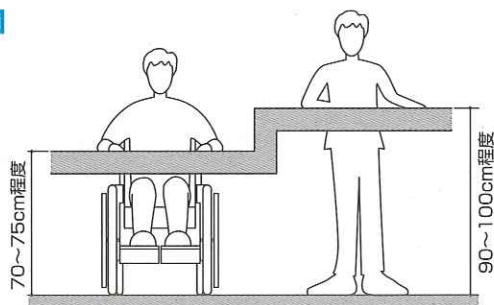
車いす対座位



車いす対立位



正面図



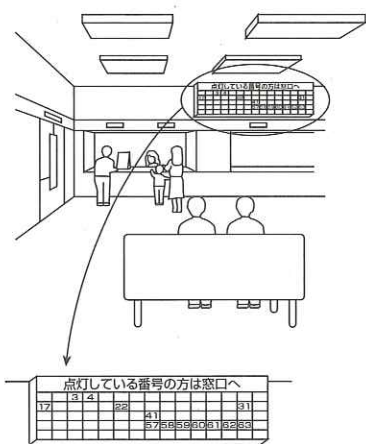
▲ 車いすが利用しやすい高さは、座位でも対応しやすく、高齢者や妊産婦、子供等の利用にも有効です。

その他

呼出掲示板

▲ 音声と文字の両方による案内が望まれます。

官公庁等の例



▲ 聴覚障害者の利用に有効です。

銀行等の例

